

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K18170

研究課題名（和文）フランスと仏領インドシナの文化的交差 仏越作家の視点

研究課題名（英文）Cultural Intersection of France and French Indochina: A Franco-Vietnamese Writer's Perspective

研究代表者

平賀 美奈子（河野美奈子）（Hiraga(Kono), Minako）

立教大学・外国語教育研究センター・准教授

研究者番号：20795570

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は1930年代の仏領インドシナにおける文化的状況を文学的、社会的な角度から分析し、ベトナムとフランスの文化的交差を明らかにすることを目的としている。2017年度から2023年度までの研究成果は研究論文4本、学会発表9件（うち国際学会1件）、出版物1冊、翻訳1冊そして雑誌連載1件となった。研究期間中にコロナ禍にみまわれ研究計画は大幅に遅れたが、当初の予定通りベトナムとフランスの両視点による文化活動を論文等によって示すことができたのは本研究の大きな成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランスとインドシナについての研究はこれまで歴史や社会的な面からは多くの研究がなされてきたが、文学からのアプローチはまだ少なかった。とくにフランス式教育を受けたベトナム人知識人の出版物に関しては、その後ベトナムが独立したことにより日の目をみることがなかった。今回本研究で扱ったグエン・ヴァン・ヴィンは長い間親仏主義者として見られていたが、彼が目指していたのはフランスに同化することではなく、フランス語を用い他のフランス植民地と連携することで、ベトナムが社会的にも、経済的にも独立することだった。この点は今までの研究では言及されておらず、本研究の成果といえる。

研究成果の概要（英文）：This research aims to analyze the cultural situation in French Indochina in the 1930s from literary and social perspectives, and to reveal the cultural intersections between Vietnam and France that have not been focused on until now. From FY2017 to FY2023, the research output has resulted in 4 research papers, 9 conference presentations (including 1 international conference), 1 publication, 1 translation, and 1 serialization in a journal.

研究分野：フランス文学

キーワード：フランス文学 ベトナム文学 インドシナ研究 諸地域・諸言語の文学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は20世紀フランス文学を研究しており、特に女性作家のマルグリット・デュラスを専門に研究している。デュラスは1914年にベトナムのサイゴン(現在のホーチミン市)の郊外に位置するザーディンで生まれた。当時仏領インドシナと呼ばれたこの地で彼女は19歳になるまで過ごした。大学進学のためにフランスへ戻ってからはベトナムに戻ることはなかったが、インドシナ時代の体験は彼女に強烈な印象を与え、その後インドシナを舞台とした自伝的作品に数度書き換えを行いながら作品を発表している。研究代表者はデュラスの自伝的作品におけるインドシナ表象をテーマとして博士論文を執筆したが、デュラスの他の小説作品とインドシナとの関係にはまだ研究の余地を残している。

(2) 仏領インドシナはベトナム、カンボジア、ラオスで構成されており、1887年に仏領インドシナ連邦が成立されて以降、1954年にジュネーヴ協定が締結され、ベトナム、カンボジア、ラオスの独立が認められるまで続いた。この間ベトナムではインドシナ総督府が置かれ、フランスによる政治や文化そして教育の中心地となった。多くのベトナムの若者がエリートとなるべくフランス式の教育を受けたが、独立後彼らは親仏主義者として批判の対象になることもあった。しかし近年、ベトナムにおいても仏領インドシナ時代の知識人に対する見直しがなされ、ベトナム独立後にはないものとされた彼らの作品および出版物に焦点があたり、再出版されるなど注目されている。

(3) 仏領インドシナはフランスの植民地政策によるものであったため、ベトナム、カンボジア、ラオスがそれぞれ独立した後は多くのフランス人入植者は帰国を余儀なくされた。デュラスの家族もまたフランスへと帰国している。フランス人入植者についての研究は残された資料も多く、歴史的または社会的角度から研究はされてきたが文学的なアプローチによる研究は少ない。

2. 研究の目的

本研究は、仏領インドシナの1930年代の文化状況を文学的、社会的な角度から分析することによって、今まで焦点が当てられていなかった、当時の仏領インドシナにおける固有の文化状況を明らかにすることことを目的とする。具体的には当時のフランス人入植者とインドシナの人々、主にフランス式教育を受けたベトナム人知識人との間で営まれた文化的交差状況を出版物や公文書を通して明確に言語化し、研究の成果としたい。

3. 研究の方法

本研究では対象を3つに分け資料の収集と調査にあたった。まずインドシナ生まれのフランス人作家としてマルグリット・デュラスの作品、次にフランス式教育を受けたベトナム人知識人による出版物について分析を行った。最後にフランスからの入植者に関する公文書などの資料を分析し、考察した。研究調査へ赴いた場所はベトナムではハノイのベトナム国家図書館、ベトナム社会科学図書館にてインドシナ時代の刊行物の資料を収集した。フランスではパリのフランス国立図書館とエクス＝アン＝プロヴァンスにある国立海外公文書館にてデュラスと彼女の家族に関する資料を収集した。集めた資料を分析し論文の執筆および研究発表として成果につなげた。

4. 研究成果

(1) (雑誌論文)「マルグリット・デュラスのインドシナ連作における〈1' enfant〉の拡がり」

本論文は日本フランス語フランス文学学会誌『フランス語フランス文学研究』(112号, 2018)に掲載された。デュラスの作品において子供は多くの作品に登場し、作品の重要なモチーフとなっている。とりわけインドシナを舞台とした自伝的作品においては、子供はまずデュラスの子供時代が投影された少女として描かれている。自伝的作品のなかでは、症状のうちに見られる未成熟な精神的不安定さが様々に形を変えながら、作品のテーマとして反復されている。本論では自伝的作品のなかで描かれる子供の持つ意味の変遷を明らかにし、それぞれの作品が子供を通してインドシナと作者の距離の違いを明らかにした。また、最後の自伝的作品『北の愛人』(1991)のなかの〈1' enfant〉(子供)に着目し、少女の下の兄の死を通してデュラスが示そうとした「死」にたいして無自覚な子供の本質を読み解いた。デュラスの自伝的作品における作者を投影した子供と作者自身との関係は、密接に関係していると当然のように捉えられていたため、これまであまり考察の対象とはされてこなかった。そのためデュラス研究に、子供をテーマとした新たなアプローチを提示できたと考えられる。しかしデュラス作品全体におけるこの子供のテーマはまだ多くの考察の余地を残している。とくに子供を主人公とした『夏の雨』(1990)の他にも様々な作品のなかに子供は登場する。デュラス作品に登場する「彼ら」あるいは「彼女ら」を考察することで、デュラス研究に新たな拡がりを提示することを今後の

課題としたい。

(2) (雑誌論文)「マルグリット・デュラスの『エミリー・L』におけるアジア嫌悪の謎をめぐって」

本論文は立教大学フランス文学研究室紀要『立教大学フランス文学』(48巻,2019)に掲載された。1987年に発表した『エミリー・L』ではセーヌ河の河口に近い町キーユブフを訪れた主人公「わたし」はアジア人の集団を見て恐怖に囚われる。「わたし」は彼らを眺めながら、アジア人の残忍さについて語り始め、ついには「終末は日本から起こる。世界の破滅。それは韓国からやってくる。」と言い放つ。このようアジア嫌悪ともとられるような描写をデュラスはなぜ書いたのか、という疑問を出発点に作品におけるデュラスとアジアとの関係を考察した。『エミリー・L』が書かれた1980年代アジア、特に日本をはじめとした東アジアは経済発展の只中にあった。彼女は経済と暴力をつなげそしてその後続く戦争を作品のなかで想起させたのである。『エミリー・L』は自伝的作品ではないが本論文では「スンダ海峡」という一見インドシナと関係のない言葉から自伝的作品との関わりを提示した。『エミリー・L』のアジア嫌悪に対する描写を分析したデュラス研究は今まで存在せず、デュラス研究に新たな読解を提示できたと考えている。

(3) (学会発表)「Pays natal et silence : la stratégie politique et littéraire de Duras」

本発表は2018年11月に立教大学で開催されたマルグリット・デュラス国際学会にて発表した。デュラスは1932年にフランスへ帰国してから一度もインドシナに戻ることはなかった。彼女は作品以外でインドシナに関する言及も非常に少ない。とくに政治に関するテキストはほとんど存在しない。それはその後ベトナムが独立し、インドシナがなくなってしまったことも要因であるが、インドシナがフランスの植民地であったことが大きく関係していると思われる。かつての宗主国の人間として、インドシナであったベトナム、カンボジア、ラオスについて語る資格が自分にはないと示しているかのようなデュラスの態度である。しかし彼女は投獄されたベトナム人政治犯への釈放を当時の首相ファム・ヴァン・ドンへ求めた手紙を書いている。手紙は実際には送られることはなかったが、彼女は常にベトナムを気にかけていたことがわかる。本テキストをたよりにデュラス作品にとっての祖国と政治的戦略との関係を探った。

(4) (学会発表)「ヴェトナムを見続ける：デュラスの『インディア・ソング』と『アガタ』を通して」

本発表は2019年2月6日、日本映像学会アジア映画研究会にて発表した。デュラスは小説以外に舞台の脚本を手掛け、映画作品も制作している。『インディア・ソング』(1975)は架空の植民地を舞台にフランス大使夫人と副領事との愛の物語が描かれている。舞台の名前がカルカットと一見インドを彷彿とさせるがそこにはデュラスの幼少期の記憶が散りばめられ、インドシナと地続きになっていることが想起される。そして『アガタ』(1981)はフランスの海辺の街ドーヴィルが舞台となっており、この2つの作品には登場人物も地理的にも異なっているように思われるが、海や大河を通して共通のイメージが浮かび上がるのである。それはデュラスが映像で表そうとした今はなき祖国インドシナである。デュラスの映画については多くの研究が行われているが、舞台も登場人物も異なる映画作品の共通点を明らかにし、インドシナのイメージつなげた研究は非常に少ない。今後は他のデュラス作品とも比較し、考察していきたい。

(5) (雑誌論文)「グエン・ヴァン・ヴィンとフランス-インドシナにおけるベトナム人知識人による新聞出版をめぐって」

本論文は、立教大学ランゲージセンター『立教大学ランゲージセンター紀要』(43号,2020)に掲載された。20世紀初頭に作家、ジャーナリスト、翻訳者として活躍したグエン・ヴァン・ヴィンの足跡を辿り、彼の出版物を検討した。彼は雑誌や新聞の出版を通して、インドシナ、とくにベトナムの近代化を目指した。実際に『東洋雑誌』や『中北新聞』を代表とする、多くの出版を行った。さらにベトナム語をアルファベット化したクオックゲーの普及に力を注いだ人物でもある。しかしグエン・ヴァン・ヴィンに対する歴史的評価はあまり高くなかった。というのも彼は親仏主義者とみなされ、尊敬すべき人物とは考えられていなかった。彼の複雑なナショナリズムを明らかにするために、まずグエン・ヴァン・ヴィンの足跡と彼を取り巻く20世紀初めのベトナムにおけるナショナリズム運動について取り上げ、次にヴィンが主筆として出版された新聞『中北新聞』(1915-1945)について取り上げた。ヴィンのナショナリズムには長い間支配される側であったベトナムの歴史が深く関わっている。出版物の分析を通して、彼を単なる親仏主義者という存在だけにとどめずに、フランス語を用いて他のフランス植民地と連携し、ベトナムの自立を図ったグエン・ヴァン・ヴィンの祖国そしてフランスへの考えを明らかにした。グエン・ヴァン・ヴィンについての研究はまだ日本ではまだない。本研究成果は本科研費を取得し、研究を行えたことによる成果である。

(6) (雑誌論文)「デュラスと書かれなかった父親：フランス国立海外文書館での調査ノート」

本研究ノートは立教大学フランス文学研究室紀要『立教大学フランス文学』(50巻,2021)に

掲載された。マルグリット・デュラスは自伝的作品を約 40 年の時間をかけて数度書き換えを行っている。小説の中では、彼女の母親は重要人物として描かれるが父親の存在はほとんど描かれない。それは実際に父親がデュラスの幼少期に病で亡くなってしまい、彼女の記憶に父親の存在があまりないことが最も大きな要因である。本研究では、デュラスの父親をフランスからの入植者という立場から考え、フランスの海外公文書館で収集した彼の資料をもとにデュラスの文学作品との関係を探った。彼の存在はまず「死」で語られるが、その死は不幸や恐怖というネガティブな意味だけにとどまらず、子どもたちを魅了する「驚嘆するもの」として描かれている。父親の「死」は作品ごとに少しずつ意味合いを変えているのである。また公文書館で発見したデュラスの両親の結婚を告発する匿名の手紙は、当時の植民地におけるフランス人社会を表している。このようなインドシナにおける白人居留区の閉鎖的な状況は彼女の自伝的作品である『愛人』のなかで作品を形づくる重要な要素として機能している。デュラスと父親の研究は、デュラス研究でも非常少ない。その点でも非常に価値のある研究成果だと考えている。またインドシナにおけるフランス人入植者研究という点でも意義のあるものであると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 河野美奈子	4. 巻 50
2. 論文標題 デュラスと書かれなかった父親：フランス国立海外文書館での調査ノート	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学フランス文学	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野 美奈子	4. 巻 43
2. 論文標題 グエン・ヴァン・ヴィンとフランス：インドシナにおけるベトナム人知識人による新聞出版をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学ランゲージセンター紀要	6. 最初と最後の頁 25～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00018692	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河野美奈子	4. 巻 48
2. 論文標題 マルグリット・デュラスの『エミリー・L』におけるアジア嫌悪の謎をめぐる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学フランス文学	6. 最初と最後の頁 167-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野美奈子	4. 巻 112
2. 論文標題 マルグリット・デュラスのインドシナ連作における《l'enfant》の拡がり	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フランス語フランス文学研究	6. 最初と最後の頁 97-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/e11f.112.0_97	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 河野美奈子
2. 発表標題 「北方の想像界」からみた「Nutshimit」と「アイヌモシリ」
3. 学会等名 日本ケベック学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 河野美奈子
2. 発表標題 イヌー文学における過去と現在：2人の女性作家の視線を通して
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2022年度春期大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河野美奈子
2. 発表標題 イヌー文学における''guerison''について：ナオミ・フォンテーヌの『クエシパン』再読
3. 学会等名 日本ケベック学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河野 美奈子
2. 発表標題 彼女たちの「ケベック」：イヌー文学作品におけるフランス語と女性を巡る一考察
3. 学会等名 日本ケベック学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野美奈子
2. 発表標題 マルグリット・デュラスの『エミリー・L』におけるアジア嫌悪の謎をめぐって
3. 学会等名 立教大学フランス語フランス文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KONO Minako
2. 発表標題 Pays natal et silence : la strategie politique et litteraire de Duras
3. 学会等名 マルグリット・デュラス国際学会(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野美奈子
2. 発表標題 ヴェトナムを見続ける デュラスの『インディア・ソング』と『アガタ』を通して
3. 学会等名 日本映像学会アジア映画研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野美奈子
2. 発表標題 マルグリット・デュラスのインドシナ連作における《l'enfant》の拡がり
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河野美奈子
2. 発表標題 デュラスと「アジア」再考ー創造された空間をめぐって
3. 学会等名 世界文学・語圏横断ネットワーク
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 河野美奈子 矢頭典枝 大石太郎 飯笹佐代子 古地順一郎 真田桂子 近藤野里 神崎舞 廣松勲 荒木隆人 梅川佳子 大矢タカヤス 岡見さえ 小倉和子 片山幹生 加藤普 神崎佐智代 岸上伸啓 木下晴美 小林順子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 384
3. 書名 ケベックを知るための56章【第2版】	

〔産業財産権〕

〔その他〕

(翻訳)バルザックの『サラジヌ』について セミナーのための未刊のノート (叢書記号学的実践) (雑誌連載)月刊誌『ふらんす』(白水社)連載「ケベックの今」2023年4月から2024年3月まで
--

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------